

東陽一監督作品 原作：住井すゑ

# 橋のない川

映画と講演  
「映画をとおして人権を考える」

## 第4回人権問題講演会

(入場無料：定員100名 \*申込は不要)

11月4日(月・休) 13:30~16:30  
コムズ 5階 大会議室

映画：「橋のない川」1992年作品  
講演：「映画のまなざし」  
—部落問題・部落民の表象—  
静岡大学教授  
黒川みどり先生

THE RIVER WITH NO BRIDGE



後援：松山市教育委員会・松山市公民館連絡協議会・松山市人権教育推進協議会  
愛媛新聞・NHK松山放送局・南海放送・テレビ愛媛・FM愛媛・あいテレビ  
愛媛朝日テレビ・愛媛CATV・リビングまつやま

主催：NPO法人「D0」  
(松山市委託事業)

D0

映画と講演

## 「映画をとおして人権を考える」

第4回人権問題講演会(入場無料:定員100名\*申し込みは不要です)

日 時 11月4日(月・休)13:30~16:30

場 所 コムズ 5階 大会議室

映 画 : 「橋のない川」 1992年東陽一監督作品 原作:住井すゑ

=あらすじ=

1908年(明治41年)奈良・小森で生まれ育った畠中誠太郎と孝二の兄弟。日露戦争で父親を亡くした二人は、ぬいというしっかり者の祖母と、ふでという心やさしい母に育てられた。被差別部落である小森の子供たちは教員や級友からことごとくいじめられていた。

1912年、11歳になった孝二は明治天皇の葬儀の夜、級友のまちえに淡い恋心を抱くが、それははかなく崩れ去ってしまう。

孝二の従兄妹の七重は、孝二に恋心を抱いていたが、その一方で自分の子供が被差別部落の子としていじめられるのを恐れていた。そして孝二の気持ちがいつまでもまちえから離れないことを知った七重は、やがて同じ被差別部落の青年との結婚を決める。一方、ふでは隣家のかねの従兄弟・伊勢田と心の中だけで愛し合うようになる。ぬいだけはそのことを知っていたが、その愛が実を結ぶには2人の境遇があまりにも似過ぎていた。

1918年、米屋で働いて8年が経ち、21歳になった誠太郎。米騒動の大混乱の中で、米屋の主人・安井の娘あさ子は「父がどんなに隠していても自分が被差別部落民の子であることは、子供の時から知っていた」と誠太郎に語り、ふたりの距離は一気に近づいていく。

そのころ、孝二は差別の廃止と人間愛を訴えるため創立された『水平社』に参加。だが、七重の祝言を前に、彼女の夫になる青年と共に孝二は警察に逮捕される。七重は「うち、水平社宣言と結婚するんやもん」と、花婿がいないまま結婚式をあげた。それは流れの激しい人の心の川に大きな橋をかける新しい闘いの始まりでもあった。

講 演 : 「映画のまなざし」

—部落問題・部落民の表象—

静岡大学教授

黒川みどり先生

部落差別は、社会の構成員がつくり出すものであり、“他者”に向ける広義の意味での“眼差し”にも深く由来する問題である。当然にして被差別当事者も、しばしば差別的と自らに映るそのような眼差しに対抗して、自ら部落民像を立ち上げてようとしてきた。したがって部落差別は、多分にそのような他者像と自画像の衝突やズレと密接に関わる問題でもある。映画はそれに接近する上で有効な手段の一つと考えることができよう。

「橋のない川」の原作者である住井すゑが、自身の作品の映画化されるに当たって、字を知らないために「作品ではなかなか読めない人達も映画ならみてもらえるんじゃないかなと思った」と述べるように、映画は、研究はもとより文学よりもさらに受容者の裾野が広いといえよう。被差別部落大衆のなかの少なからぬ人びとが差別と貧困によって文字を奪われてきたという現実を鑑みると、そのことの意味は重要である。

黒川みどり著「描かれた被差別部落」(岩波書店)より